

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



大友義右は、室町後半から戦国時代の武将・守護大名で、豊後大友家第17代当主です。

長祿3(1459)年に生まれ、文明16(84)年26歳で父大友政親の家督を継ぎますが、明応2(93)年に京都で管領細川政元のクーデター「明応の政変」が起こり、室町將軍家が足利義植と義澄に分裂すると、政親は義澄派、義右は義植派について家中が分裂、混乱が広がりました。

戦国の世に入っていく中、義右は明応5(96)年に病を患い、5月に38歳で没します。父政親も、周防山口の大名大内義興との抗争に敗れ、翌6月に長門の地で切腹。祖父親繁、父政親、子義右と続いた家督の直系継承が、断絶する事態となったので

す。時代の流れに翻弄され天折した不運な武将に見える義右ですが、実は、そのわずかな政権担当期間に、政権性質の要となる重要な政策を行っています。その政策は、豊後国直入郡(現竹田市と田布市の一部)を本貫とする重臣田北氏に宛てた文書に残されています。

義右は田北六郎に対し、「船造作の用所として、方々に材木の事、所望候。よつて別紙注文をもつて申し候。これは公事にあるべからず候。芳志として奔走候はば、悦喜候」と命じているのです。「造船事業のため、豊後国内方々に材木の調達を命じる。材木の種類や数の詳細は、別紙注文書に書いた。これは、公事(税)ではない。芳志(主人への心遣い)として大名船造営事業に努めることが喜ばしい限りだ」という内容です。

戦国大名は、自らの船を建造・保有する船持ち大名でした。領国が海に開き、海洋活動が活発な西国の大名は、陸上のみでなく隣接海域までもを含めた統治体制の整備を進めていく必要があったからです。海のない甲斐(山梨県)の武田氏ら東国大名とは異なる政権の特質です。中でも大友氏は、すでに15世紀前半の10代大友親世の代に、1500石積み的大型帆船「春日丸」に公用物資を積み込んで九州一畿内間を輸送するといふ、当時としては最先端の海運政策を実施しています。

航空機から見た府内。海に開けた都市の特徴が分かる(筆者撮影)



大名船を家臣団で造営

16世紀末の古図を見ると、大友氏の本拠都市府内(大分市)の街路の北端に、別府湾につながる「船入」が描かれています(現長浜町1丁目辺り)。親世、義右ら歴代当主がおのおの建造した大名船のドックと思われます。領国各地から集めた材木を使い、家臣団の「芳志」で建造されたその大型帆船は、武家の主従関係を象徴するモニュメントとしても、民衆の注目を集めたことでしょう。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

大友義右

戦国大名は、自らの船を建造・保有する船持ち大名でした。領国が海に開き、海洋活動が活発な西国の大名は、陸上のみでなく隣接海域までもを含めた統治体制の整備を進めていく必要があったからです。海のない甲斐(山梨県)の武田氏ら東国大名とは異なる政権の特質です。中でも大友氏は、すでに15世紀前半の10代大友親世の代に、1500石積み的大型帆船「春日丸」に公用物資を積み込んで九州一畿内間を輸送するといふ、当時としては最先端の海運政策を実施しています。